

伊藤小坡研究

編年篇

山口泰弘

A Research on Paintings by Shoha Ito

Yasuhiro YAMAGUCHI

はじめに

大正から昭和にかけて京都を拠点に活動した女流日本画家伊藤小坡(1877~1968)の生涯・画歴・作品に関する一連の研究の嚆矢として、「伊藤小坡研究 作品篇」⁽¹⁾において、習画期から画風完成期に至る主要作品を取り上げて、画風展開の跡づけを試みた。本稿では、その第2回として、小坡の画歴を中心とした経歴を編年形式で記述する。

その前段として、まず経歴を概観の概略を記して、生涯の全体像を把握することとしたい。

1. 経歴の概略

伊藤小坡は、本名を宇治土公佐登^{うじとこ}という。三重県度会郡宇治浦田町(現伊勢市宇治浦田町)にある猿田彦神社の宮司の長女として生まれる。幼少期から古典文学、茶の湯、柔術などを習い、明治23年(1890)頃から新聞小説の挿絵を模写し始め、明治28年(1895)頃には京都四条派の流れをくむ磯部百鱗から運筆など初歩的な絵の手ほどきを受けた。

特に、歴史人物を好んで描いたという。小坡は、昭和時代前期第二の画風完成期に『太平記』の伊賀局、伊達騒動の乳人政岡、平安時代の歌人斎宮女御、戦国武将山内一豊の妻見性院など、歴史・文学に題材を採った大作を官展に出品している。その関心が早くもこの習画期に現れていたのは注目される。

明治31年(1898)には画家になることを決意し京都に出る。このとき磯部百鱗に紹介されたのが四条派の画家森川曾文(1847~1902)であった。曾文は、長谷川玉峰に師事した四条派の正統を継ぐ画家で、山水花鳥を得意とした。曾文からは初めての画号「文耕」を与えられた。一方で、美術史家の荒木矩から漢字と国語及び美術史を、漢学者の巖本範治から漢字を学ぶなど、歴史や文学の素養を高める努力を惜しまなかった。大正期に小坡自身とその周囲に繰り広げられる日常風景を取り上げた作を多く発表する。風俗画と呼ぶべきテーマが大正期の作域を象徴するが、大正10年(1921)の《琵琶記》から主題傾向に大きな変化を見せはじめる。この作品は、作風においては大正期の典型的な柔らかい筆致と調和的な色彩を用いているが、主題としては、日常的な風俗ではなく中国の古典戯曲を採り上げている。昭和期に入ると、すでに記したように、歴史や文学に想を得たものに劇的に転換し、以降日常風景を取り上げることはなくなる。その嚆矢というべき象徴的な作が《琵琶記》である。この作品は翌年開催された日仏交換美術展にも出品され、竹内栖鳳の作とともにフランス政府買い上げの対象となり、のち寄贈に扱いが変わるが、現在パリのポンピドゥ・センターの所蔵となっている。

やや遡るが、京都で最初の師森川曾文が病悪化のため門を閉じる。特に後継の師を定めなかったため、

自ら師を選ぶ自由を得た小坡は、明治33年（1900）から谷口香嶠に師事するようになる。香嶠（1864～1915）は、四条派の画家幸野樸嶺の門下で、菊池芳文、竹内栖鳳、都路華香らとともに四天王といわれた。特に、有職故実に長じており、歴史画に造詣が深かった。これが、歴史画に関心のあった小坡が新たに師事した理由とみられる。明治40年（1907）頃、京都新古美術展に《平家大宰府落》を出品、4等賞を受賞して画家としての基盤を確立させている。

明治38年（1905）に同門の伊藤鷺城と結婚し、伊藤姓を名乗るようになる。翌年には長女知子、明治43年（1910）には次女芳子、大正3年（1914）には三女正子が誕生している。三女正子が後に読売新聞のインタビューで語ったところでは、小坡の人柄は「90歳まで生きましたが、さっぱりした、風通しのよい家庭人」であったという。

一方画家としては、大正4年（1915）の第9回文部省美術展覧会（以下文展という。）に出品した《製作の前》が初入選で3等賞を受賞している。これを契機に上村松園に続く女性画家として一躍脚光を浴びるようになり、大正6年（1917）には、京都を訪れた貞明皇后の御前で揮毫する機会を与えられ、富岡鉄斎、竹内栖鳳など京都画壇の大家と並んで、女性として松園とともに加わるなど、高い評価を受けていたことを示している。

文展にはその後も、大正5年（1916）の《つづきもの》や大正7年（1918）の《ふたば》など、普段の何気ない日常の場景を、女性としてあるいは妻、母としての視点から描いて、大正期の作風をかたちづくっている。

昭和3年（1928）、竹内栖鳳が主催する画塾である竹杖会の一員となり、これが小坡の画風に一大転機をもたらす。同年の第9回帝国美術展覧会（以下、帝展という。）に出品した《秋草と宮仕へせる女達》は画期を象徴する初発的な作例と言える。この作品は典雅な平安時代の風俗をもとに、『源氏物語』に登場する7人の女性と、そのひとり秋好中宮が好む色とりどりの秋草が配され、平安調の古典的な雰囲気描かれている。主題としてはすでに転機の兆しを示していた《琵琶記》を継承したといえるが、作風は大きく変わる。《琵琶記》のやわらかな運筆とやや沈んだ調和のある色調とは明らかに異なり、細く硬質な線描と鮮やかな色面構成が特徴となる。翌昭和4年（1929）第10回帝展の、《秋好中宮》は、前年同様『源氏物語』、その翌年昭和5年（1930）の《伊賀のつぼね》は『太平記』など歴史文学に取材した作品を発表、大正期とは全く異なる小坡の新様式が確立した。

昭和43年（1968）に92歳で没。

2. 年 譜

この項では、小坡の画業を中心とした事績を編年形式で記述する。

年齢は数え年で示す。また、各年の最後には、その年の代表作を官展出品作を中心に挙げる。表記は、作品名（所蔵者）で示す。

なお、この年譜は、「伊藤小坡年譜」（伊藤小坡美術館編）を基本にして、「古川美術館開館1周年記念特別展 女性が描いた女性像 上村松園と伊藤小坡」展（古川美術館）及び「伊藤小坡とその時代」展（桑名市博物館）所収の年譜を参照し、さらに新知見を加えた。

○1877年（明治10） 1歳

4月24日、三重県度会郡宇治浦田町（現伊勢市宇治浦田町）に猿田彦神社宮司宇治土公貞幹の長女として生まれる。本名佐登。幼少時より、父から古事記、日本書紀などの古典教育を受ける。また書道、茶道、盆石、和裁といった稽古事のほか、柔術も習う⁽²⁾。

○1890年（明治23） 14歳

この頃、毎朝配達される朝日新聞を楽しみにする。この頃、新聞小説の挿絵を竹紙に模写するなど描くことに興味を示す⁽³⁾。

○1895年（明治28） 19歳

この頃磯部百鱗に教わる。歴史人物を好んで描く。百鱗（1836～1906）は、代々伊勢神宮の御師を務める「磯部大夫」の家系に生まれる。磯部大夫は宇治今在家町に邸宅を構えており、小坡の育った猿田彦神社は近傍にあった。京都へ上って四条派の長谷川玉峰に師事した後、伊勢に戻って家職を継ぐかたわら、画家として活動を続けた⁽⁴⁾。

○1897年（明治30） 21歳

小坡自身が親族の澤潟久富（宇治山田市長、三重県議会議長を歴任）氏に相談し、3年間ほどという名目で京都への絵画修行に出る許可を磯部百鱗及び父から得る。百鱗からは、森川曾文を紹介してもらおう。

曾文（1847～1902）は、曾文の「文」と、宇治山田だから田があるだろうと、「耕」の字から「文耕」の名を与えたという。

《官女折桜枝》を模写（落款：文耕女史）。

美術史家荒木矩（1865～1941）から漢学と国文学及び美術史を学び、漢学者巖本琴城（1863～1942）にも師事⁽⁵⁾。

○1898年（明治31） 22歳

第2回全国絵画共進会展に《少女》を出品、3等褒状。

この頃、上京区室町夷川上ルに住む。

11月、日本美術協会の美術展覧会に《菊慈童図》を出品、3等褒状⁽⁶⁾。

作品：城守る女達（現名：烈女形名の妻 伊藤小坡美術館）

○1899年（明治32） 23歳

1911年（明治44）にかけて京都美術協会主宰の新古美術展覧会に出品。出品画10回、5等賞7回、4等賞1回。

4月、全国絵画共進会に《清少納言》を出品、3等褒状⁽⁷⁾。

5月、第2回全国絵画共進会に《物おもひ図》を出品、1等褒状⁽⁸⁾。

5月、新古美術品展覧会に《若菜摘ノ図》を出品、2等褒状⁽⁹⁾。

○1901年（明治34） 25歳

曾文が病気のため、谷口香嶠の門下となる。香嶠（1864～1915）は、四条派の画家で幸野楳嶺に入門。菊池芳文、竹内栖鳳、都路華香らとともに楳嶺門の四天王といわれる。有職故実に長じており、歴史画に造詣が深かった。これが、歴史画に関心のあった小坡が新たに師事した理由とみられる。京都市立絵画専門学校で教鞭をとった。京都でも歴史画の第一人者として認められていた。師から《小坡》の画号をもらう。

5月、第1回岐阜絵画共進会に《杜鵑一声之図》を出品、2等褒状⁽¹⁰⁾。

○1902年（明治35） 26歳

5月、第8回京都新古美術展覧会に《敦盛》を出品、「小坡」名。4等褒状⁽¹¹⁾。

5月、第1回全国絵画共進会に《少女図》を出品、3等褒状⁽¹²⁾。

○1903年（明治36） 27歳

第5回内国勸業博覧会に《伊賀の局》を出品、「小坡」名。

某展覧会に「小坡」名で《人物》を出品⁽¹³⁾。

当時の住所は《京都市上京区室町通夷川上ル鏡屋町26番戸中橋方》、名前は「二見さと号小坡」とある。

この頃、谷口香嶠門下として、時田一挙、久我香溪、伊藤鷺城、二見小坡女 初メ森川曾文門、岐美竹涯、麻生玉溪⁽¹⁴⁾。

○1904年（明治37） 28歳

小坡の名で《哀別》を京都新古美術展覧会へ出品、5等賞⁽¹⁵⁾。

○1905年（明治38） 29歳

二見小坡の名で《夕顔》を京都新古美術展覧会へ出品、5等賞。

同門の伊藤鷺城と結婚し、伊藤姓を名乗る。中京区釜座通竹屋町上ルに住む。鷺城（1873～1948）は、兵庫県生まれ。本名又次。画号は白鷺城（姫路城）に因む。

○1906年（明治39） 30歳

第11回京都新古美術展覧会に《平家没落之図》を出品、5等賞。落款に「伊藤小坡」を使用⁽¹⁶⁾。

長女知子が生まれる。

作品：平家没落之図（平家大宰府落）（伊藤小坡美術館）

○1907年（明治40） 31歳

《幽居》を京都新古美術展覧会へ出品、5等賞。

○1908年（明治41） 32歳

《母子》を京都新古美術展覧会へ出品、5等賞。

○1909年（明治42） 33歳

《かくれんぼ》を京都新古美術展覧会へ出品、4等賞⁽¹⁷⁾。

○1910年（明治43） 34歳

次女芳子が生まれる。

○1911年（明治44） 35歳

《かごの鳥》京都を新古美術展覧会へ出品、5等賞。

黒田天外（京都日出新聞記者）評⁽¹⁸⁾「展覧会にあらはれたる絵画」には、「伊藤小坡の《かごの鳥》大手に描きこなして其時代の面影が見ゆる佳作である。」とある。

○1913年（大正2） 37歳

谷口香嶠の自適会研究会に《品さだめ》を出品。

○1914年（大正3） 38歳

伊藤小坡女史美人画会が京都倶楽部において開かれる。
三女正子が生まれる。

○1915年（大正4） 39歳

第9回文展〔10月14日～11月14日、11月21日～12月10日〕に《製作の前》を出品。初入選3等賞。
谷口香嶠没。
作品：製作の前

○1916年（大正5） 40歳

第10回文展〔10月14日～11月20日、11月27日～12月10日〕《つづきもの》（福富太郎コレクション）を出品。
『大正五年度帝国絵画番附』に、「地方の部文展作家」⁽¹⁹⁾として登載される。
作品：つづきもの（福富太郎コレクション）

○1917年（大正6） 41歳

11月15日、京都岡崎の公会堂にて貞明皇后の御前にて揮毫を行う。他に、上村松園・富岡鉄斎・今尾景年・都路華香・山元春挙・菊池芳文・竹内栖鳳が出席。
『現代画家番附』（1917年刊1941年改定版）「日本画家欄」「関西之部」に17番目に登載されている。
女性では上村松園（6番目）に次いで2番目。

○1918年（大正7） 42歳

第12回文展〔10月14日 11月20日、11月27日～12月11日〕《ふたば》（三重県立美術館）を出品。
この時点での住所は「京都市釜屋通り竹屋町上る」上京区室町下長者町上ルに移る。
作品：ふたば（三重県立美術館）

○1919年（大正8） 43歳

11月、井口華秋らとともに16人で創立同人として、反帝展派の日本自由画壇を結成。翌年秋、帝展と同時期に第一勸業館で第一回展を開催。しかし、竹内栖鳳のすすめで翌年には帝展に復帰。
『大正八年度帝国絵画番附』に、「地方文展作家」⁽²⁰⁾として登載される。

○1920年（大正9） 44歳

第2回帝展〔10月16日～11月22日、11月29日～12月13日〕《夏》（京都市美術館）を出品。
島成園の発起により、関西閩秀画家を糾合する計画が持ち上がり、梶原緋佐子らと並び小坡の名前も取り沙汰される。
『大正九年度帝国絵画番附』に、「地方之部文展作家」⁽²¹⁾として登載される。
作品：夏（京都市美術館）

○1921年（大正10） 45歳

第3回帝展〔10月14日～11月20日、11月27日～12月11日〕に《琵琶記》を出品。

パリで展覧（日仏交換展覧会）が開かれ《琵琶記》を出品⁽²²⁾。同展には、日本画50点、洋画50点、装飾美術150点が出品された。なかには上村松園《花がたみ》もあった。本作は、フランス政府に寄贈（当初買い上げであったが後に寄贈に変更）⁽²³⁾。リュクサンブール美術館所蔵となり現在ポンピドゥー・センターに移管。自選10点のひとつ（1960年（昭和35）の項を参照）。縁戚で万葉学者として知られる澤瀉久孝が、昭和9年10月7日、24日、11月3日にリュクサンブール美術館で同作品を実見⁽²⁴⁾。

『大正十年帝国絵画番附』に、「帝展作家地方」⁽²⁵⁾として登載される。

作品：琵琶記（パリ・ポンピドゥー・センター）

○1922年（大正11） 46歳

平和記念東京博覧会〔3月10日～7月31日〕に《またるゝ楽み》を出品⁽²⁶⁾。第4回帝展〔10月14日～11月20日、11月27日～12月11日〕に《山羊の乳》（ウッドワン美術館）を出品。

作品：またるゝ楽み、山羊の乳（ウッドワン美術館）

○1923年（大正12） 47歳

第10回再興日本美術院展覧会〔10月30日～11月25日（大阪）、12月23日～大正13年1月6日（東京）〕に連作《雨月物語の蛇性の妖媛》を出品。

日本美術展覧会に《怨鏡》を出品。大毎新聞社楼上にて良子女王御前にて揮毫。9月1日の関東大震災によりこの年の帝展休会。

『大正拾貳年度改正東西画家格附』に、「地方画家席」⁽²⁷⁾として登載される。

『大正十二年度帝国絵画番附』に、「帝展日本画京都」⁽²⁸⁾に登載される。

作品：怨鏡

○1924年（大正13） 48歳

三女正子入院のため制作を休む。

○1925年（大正14） 49歳

第6回帝展〔10月16日～11月20日、11月27日～12月11日〕に《廻廊》を出品。自選10点のひとつ⁽²⁹⁾。

作品：廻廊

○1926年（大正15/昭和元） 50歳

第1回聖徳太子奉賛美術展覧会〔5月1日～6月10日〕（東京府美術館）に《やすらひはな》を出品。自選10点のひとつ⁽³⁰⁾。

帝展出品は長女知子の結婚により休む。

《山内一豊の妻》『キング』（講談社 大正15年5月号）口絵を制作。

『大正十五年版 東洋画家名鑑』に、「文帝展出品画家日本画関西」⁽³¹⁾に登載される。

『増補古今書画名家一覧』に、「現代各派閥秀名家」⁽³²⁾に登載される。

作品：やすらひはな

○1927年（昭和2） 51歳

『増補古今書画名家一覽』に、「現代各派閥秀名家」⁽³³⁾に登載される。

○1928年（昭和3） 52歳

第9回帝展〔10月16日～11月20日〕に《秋草と宮仕へせる女達》（伊藤小坡美術館）を出品。自選10点のひとつ⁽³⁴⁾。

竹内栖鳳の竹杖会に入る。

作品：秋草と宮仕へせる女達（伊藤小坡美術館）

○1929年（昭和4） 53歳

第10回帝展〔10月16日～11月20日〕に《秋好中宮図》（伊藤小坡美術館）を出品。

作品：秋好中宮図（伊藤小坡美術館）

○1930年（昭和5） 54歳

第2回聖徳太子奉賛美術展覧会〔3月17日～4月14日〕（東京府立美術館）に《豊艶》を出品。

第11回帝展〔10月16日～11月20日〕に《伊賀のつぼね》（伊藤小坡美術館）を出品。自選10点のひとつ⁽³⁵⁾。

作品：伊賀のつぼね（伊藤小坡美術館）

○1931年（昭和6） 55歳

帝展推薦となる。第12回帝展《春日詣》無監査となる。自選10点のひとつ⁽³⁶⁾。

帝国美術館の招待により文展25年記念式及び祝賀会に出席。記念式は東京美術学校、祝賀会は上野精養軒で開催。

講談社の社内報の表紙絵として《十二ヶ月図》（絹本著色）制作。

作品：春日詣

○1932年（昭和7） 56歳

この頃より吉川観方主宰の写生会などに参加し始める。

この時の住所は「京都市上京区室町中長者町南 電話西陣2581番」⁽³⁷⁾。

第13回帝展〔10月16日～11月20日〕に《夕ぐれ（虫売り）》を出品。

《夕ぐれ》が文部省美術展覧会創立25周年記念遺作展覧会の推薦となる。

中長者町南在住。

○1933年（昭和8） 57歳

大札記念京都美術館美術展覧会に《夕涼み》を招待出品。

○1934年（昭和9） 58歳

大札記念京都美術館美術展覧会〔5月1日～25日〕に《月待つ夕》（水野美術館）を出品。

翌8日にかけて京都美術倶楽部において「伊藤小坡先生個人展」開催。

講談社の社内報の表紙絵として《十二ヶ月図》（絹本著色）制作。

日満展覧会に小品《パラソル》を出品。

○1936年（昭和11） 60歳

「8時、伊藤小坡女史来。帝展出陳につき相談を聞く。」（「吉川観方日記」16日）

「8時、伊藤女史9時頃来。化政頃服具を貸与。」（「吉川観方日記」17日）

「午後1時頃伊藤小坡来、帝展出陳の為化政頃服具を貸与。」（「吉川観方日記」18日）

「そのころに伊藤小坡女史十三詣母子服返しに来らる。」（「吉川観方日記」9日）

文部省美術展覧会（以下、新文展という。）昭和11年招待展〔11月6日～23日〕に《十三詣の装ひ》（木下美術館）を出品。

五葉会展に《夏の宵》出品⁽³⁸⁾。

作品：十三詣の装ひ（木下美術館）

○1937年（昭和12） 61歳

風俗博物館開設記念・京舞妓冬晴装の扮装写生会に参加。

この日から3日間、日本橋白木屋で伊藤小坡個展が開催される。

7月5日・6日、大阪美術倶楽部、8日・9日、京都美術倶楽部で伊藤小坡氏個展開催が開かれる。

『改訂古今書画名家一覽』に、「現代閨秀各派名家」⁽³⁹⁾に登載される。

○1938年（昭和13） 62歳

4月20日～23日、日本橋白木屋で個展⁽⁴⁰⁾。《紅葉狩》《青葉の頃》《醍醐の花》など20点。7月5・6日大阪美術倶楽部、同8・9日京都美術倶楽部で個展⁽⁴¹⁾。《虫売り》《十三詣の装ひ》《尚武》《観月》《総動員》など21点を出品⁽⁴²⁾。

第2回新文展〔10月16日～11月20日〕に《齒久ろめ》⁽⁴³⁾（松岡美術館）を出品。自選10点のひとつ⁽⁴⁴⁾。

作品：齒久ろめ（松岡美術館）

○1939年（昭和14） 63歳

美術往来社新作画展に《雪の朝》を出品。

4月3日～17日、美之国社十五周年記念展（日本橋三越）に《青葉のかげ》出品⁽⁴⁵⁾。

第3回新文展〔10月16日～11月20日〕に《神詣》を出品。

作品：神詣（伊藤小坡美術館）

○1940年（昭和15） 64歳

紀元二千六百年奉祝美術展覧会〔10月1日～22日〕に《山内一豊の妻》（伊藤小坡美術館）を出品⁽⁴⁶⁾。

同作品は、2016年（平成28）に再発見され、76年ぶりに伊藤小坡美術館にて収蔵及び展示。

作品：山内一豊の妻（伊藤小坡美術館）

○1941年（昭和16） 65歳

第6回京都市美術展覧会〔5月1日～20日〕に《ほとゝぎす》を出品。自選10点のひとつ⁽⁴⁷⁾。

この時の住所は「京都市上京区室町通下長者町上56」。

作品：ほとゝぎす（足立美術館）

○1942年（昭和17） 66歳

第7回京都市美術展覧会〔5月1日～20日〕に《七夕》を出品。

第5回新文展〔10月16日～11月20日〕に《乳人》（伊藤小坡美術館）を出品。

日本画家報国会主催軍用機献納作品展（日本橋三越）に《春宵》（東京国立近代美術館）を出品。

『現代画家番附』に登載される⁽⁴⁸⁾。

作品：乳人浅岡（伊藤小坡美術館）（出品名は《乳人》）、春宵（東京国立近代美術館）

○1944年（昭和19） 68歳

奉祝京都市美術展覧会〔7月1日～11月20日〕に《参籠》を出品。

文部省戦時特別美術展〔11月25日～12月15日〕に《烈女形名の妻》を出品。

○1949年（昭和24） 73歳

《春日野》を第1回京都美術懇話会展に出品。自選10点のひとつ⁽⁴⁹⁾。

○1951年（昭和26） 75歳

日本現代美術展に《巖島詣》を出品。自選10点のひとつ⁽⁵⁰⁾。

○1952年（昭和27） 76歳

《観桜》を第59回伊勢皇太神宮式年奉賛美術展に出品。

○1956年（昭和31） 80歳

八坂神社境内にて七五三の男児を描く。

第1回歴史美術展に《鶴ヶ岡の舞》が招待出品。

作品：鶴ヶ岡の舞（伊藤小坡美術館）

○1958年（昭和33） 82歳

歴史風俗展《鶴ヶ岡の舞》招待出品

○1960年（昭和35） 84歳

「京都美術館ヨリ申越シニ依リ提出セシ小坡画歴、出品作品記入書」を京都市に提出。自選の代表作として10点を挙げる。以下の10点で、小坡の記述順による。

《琵琶記》	1921年（大正10）	第3回帝展
《廻廊》	1925年（大正14）	第6回帝展
《秋草と宮仕へせる女達》	1933年（昭和8）	第9回帝展
《伊賀の局》	1930年（昭和5）	第11回帝展
《春日詣》	1931年（昭和6）	第12回帝展
《齒くろめ》	1938年（昭和13）	第2回新文展
《やすらいはな》	1926年（大正15）	第1回聖徳太子奉賛美術展覧会
《巖島詣》	1951年（昭和26）	日本現代美術展（文部省主催）
《ほととぎす》	1941年（昭和16）	第6回京都市美術展覧会
《春日野》	1949年（昭和24）	第1回京都美術懇話会展

○1966年（昭和41） 90歳

神宮徴古館において「郷土の画家3人展」が開催される。

○1968年（昭和43） 92歳

1月7日没。

○1992年（平成4）

11月3日、古川美術館で「古川美術館開館1周年記念特別展 女性が描いた女性像 上村松園と伊藤小坡」開催（1993年1月24日まで）。

○1996年（平成8）

伊藤小坡美術館開館。

○1998年（平成10）

9月17日、京都高島屋で「松園、小坡、蕉園、成園、緋佐子の美人画 女性画家が描く日本の女性たち展」開催（9月29日まで）。その後、奈良そごう美術館、新宿小田急美術館を巡回。

○2009年（平成21）

10月17日、桑名市博物館で「伊藤小坡とその時代」展開催（11月23日まで）。

おわりに

以上、小坡の画歴を中心とした履歴を編述してきた。生涯における画風展開の歴史は、前稿で記したように、次のように画期することができる。

- | | | |
|-------------|--------|---|
| A. 習画期 | 明治時代後期 | 菊童子、少女と銀猫、烈女形名の妻、平家太宰府落 |
| B. 画風完成期 I | 大正時代 | 製作の前、つづきもの、琵琶記 |
| C. 画風完成期 II | 昭和時代前期 | 秋草と宮仕へせる女達、秋好中宮、伊賀のつぼね
幻想、神詣、山内一豊の妻、乳人浅岡 |

前稿によって明らかとなったのは、小坡の画歴は大きく分けて大正時代の画風完成期 I、昭和時代前期の画風完成期 II というふたつの時代に分けて捉えることができるということであった。小坡の生涯は92年に及ぶが、画歴の終端は、75歳前後までとなっていることが、この編年によって明らかとなる。前半の大正時代は、主題としては風俗画的自画像、表現としては柔らかい線描と抑えた色調で写実的に描くのを特徴としており、後半の昭和時代においては、華麗な色彩と研ぎ澄まされた硬く細い線描で描いた。様式的にみると、写実と装飾という対局的画を小坡は生涯の前後期で描き分けたということもできる。

註

- (1) 『三重大学教育学部研究紀要』 第69巻 人文科学 2018年
- (2) 田中良三「伊藤小坡について（その1）『学と文芸』 37集 1988年

- (3) 田中良三「伊藤小坡について（その1）『学と文芸』 37集 1988年
- (4) 田中良三「伊藤小坡について（その1）『学と文芸』 37集 1988年
- (5) 田中良三「伊藤小坡について（その1）『学と文芸』 37集 1988年
- (6) 美術展覧会褒状
京都府 二見文耕
菊慈童図
褒状三等
本会審査長ノ薦告ヲ領シ之ヲ稟請ス
明治三十一年十一月十二日
日本美術協会総裁大勲位威仁親王
- (7) 全国絵画共進会褒賞証
京都府 二見文耕女
清少納言
褒状三等
明治三十二年四月二十三日
- (8) 第二回全国絵画共進会賞状
京都府 二見文耕
物おもひ図
褒状一等
審査長 正五位勲三等山高信離
右薦告ニ依リ茲ニ之ヲ授与ス
明治三十二年五月
全国絵画共進会 会頭従三位勲二等男爵北垣国道
- (9) 新古美術品展覧会褒状
京都府 二見文耕女
一若菜摘ノ図
式等褒状
審査長 正五位勲三等山高信離
右薦告ニ依リ之ヲ授与ス
明治三十二年五月五日
京都美術協会総裁大勲位貞愛親王
- (10) 第一回岐阜絵画共進会褒賞授与之証
京都府 二見文耕女
杜鵑一声之図
式等褒状
右審査ノ成績ニ依リ之ヲ授与ス
- (11) 第八回新古美術展覧会褒賞証
絵画 画題 敦盛
二見小坡
褒状 四等
審査長正五位勲四等工学博士 中澤岩太
右薦告ニ依リ之ヲ授与ス
明治三十五年五月七日
京都美術協会総裁大勲位功三級貞愛親王
- (12) 第一回全国絵画共進会賞状
京都府 二見文耕女

少女図

褒状参等

審査長 従五位岡倉覚三

右薦告ニ依リ茲ニ之ヲ授与ス

明治三十年五月九日

京都市参事会

京都府知事従三位勲一等男爵山田信道

- (13) 『京都美術協会雑誌』 128 1903 年
- (14) 『京都美術協会雑誌』 130 1903 年
- (15) 『京都美術協会雑誌』 142 1904 年
- (16) 『京都美術』 4 1906 年
- (17) 『京都美術』 16 1909 年
- (18) 『京都美術』 22 1911 年
- (19) 東京文化財研究所・明治大正期書画家番付データベースによる
- (20) 東京文化財研究所・明治大正期書画家番付データベースによる
- (21) 東京文化財研究所・明治大正期書画家番付データベースによる
- (22) 同展については、『美術月報』 3-3 11月号 通巻 221 1911年 及び『美術月報』 3-5 1月号 通巻 221号 1912年を参照。
- (23) 報知新聞「サロン展覧会で素晴らしい日本画の人気殊に評判の小坡女史の《琵琶記》 1911年
- (24) 田中良三「伊藤小坡について（その3）『学と文芸』 40集 1988年
- (25) 東京文化財研究所・明治大正期書画家番付による
- (26) 『美術月報』 3-7 4月号 通巻 225 1912年
- (27) 東京文化財研究所・明治大正期書画家番付データベースによる
- (28) 東京文化財研究所・明治大正期書画家番付データベースによる
- (29) 1960年の事項を参照
- (30) 1960年の事項を参照
- (31) 東京文化財研究所・明治大正期書画家番付データベースによる
- (32) 東京文化財研究所・明治大正期書画家番付データベースによる
- (33) 東京文化財研究所・明治大正期書画家番付データベースによる
- (34) 1960年の事項を参照
- (35) 1960年の事項を参照
- (36) 1960年の事項を参照
- (37) 『京都画壇大観』 1933年
- (38) 『美之国』 12-8 1936年
- (39) 東京文化財研究所・明治大正期書画家番付による
- (40) 『塔影』 14-6、『美之国』 14-5 1938年
- (41) 『塔影』 14-8、『美之国』 14-8 1938年
- (42) 『美之国』 14-8 1938年
- (43) 『塔影』 14-11に展評 1938年
- (44) 1960年の事項を参照
- (45) 『塔影』 15-16、『美之国』 15-5に作品評 1939年
- (46) 『塔影』 16-12 S1512に作品評 1940年
- (47) 1960年の事項を参照
- (48) 東京文化財研究所・明治大正期書画家番付による
- (49) 1960年の事項を参照
- (50) 1960年の事項を参照